

# 宮廷女流日記文學

池田龜鑑著



# 宮廷女流日記文學

池田  
龜鑑  
著

至文堂

---

宮廷女流日記文学

---

昭和40年5月30日発行  
昭和54年12月15日重版

いけ だ き かん  
池田亀鑑 著

発行所 至文堂

東京都新宿区払方町27

東京(260)2211(代)

発行者 佐藤泰三

---

印刷 株式会社文栄社

## は し が き

わが国の文学の歴史について申しますと、王朝時代という一時代は、後宮の女性を中心とする浪漫的な文学の栄えた時代です。その美しい浪漫的の精神が、どうして宮廷に發生し、どうして發達し、またどうして凋落したか、その事情を本質的に明かにすることは、私において、久しい以前からの限らない興味でした。で、私は、ずい分以前から、まるでむさぼるように、その時代の物語や、家集などをよみふけりましたが、それ等の多くの作品の中で、もっとも私の感興を引きましたのは、後宮女性の日記という特殊な文学の一系列でした。

浪漫的な文化の中心が、紅玉の炎のような感情の奔放であるとしますと、思索的な文化の中心は、深淵の青色にも似た理性の透徹であるといえましょう。紅の感情と、青の理性との織りなした心の錦が、とりもなおさず、これらの日記文学だと思っています。

宮廷女流の日記文学を少しずつ調べて見ようと思ひ立ったのは、今からおよそ六年ばかり前のことです。それから、機会あるごとに、東京をとび出して、あちらの図書館、こちらの文庫と、方々歩きまわって、去年、不完全ながら、ともかく「宮廷女流日記考」二十三巻の一段落をつけることにしました。それは、土佐日記考、蜻蛉日記考、和泉式部日記考、紫式部日記考、清少納言枕草子考、更級日記考、讃岐典侍日記考、弁内侍日記考、十六夜日記考、中務内侍日記考から成るもので、それに宮廷女流日記索引と、宮廷女流日記とを合せたものです。

以上は、ただいままでの研究では、まるで未熟で、お話にならないものです。これを基礎にして、これから、十年も、二十年も、一生懸命に勉強して行かなければなりませんまい。わずか五年や六年で、こんな仕事が出来て来るはずのものではないのですから。

でも、私としては本当に一生懸命でした。全くすべてをうちこんで勉強しました。興のわいてきたときには、幾度か徹夜もしました。出来上ったものは、どんなに物足りなくても、過程そのものは、実に尊かったと思います。私が、学問の面白さと、有難さとを、つくづくと体験したのは、全くこの勉強のおかげでした。

けれども、正直に申しますと、この仕事に従っている間、私は、ともすれば、矛盾した心の対立に苦しみました。それは、国文学の研究に、考証的態度と、鑑賞的態度とが、どうしてもあい調和することの出来ないものではないかという疑問でした。何と長い間、この対立に苦しんだことでしょう。

だが、有難いことには、近ごろは、何だか、二つのものに区別がおかれないようになってきました。かつて、阿波文庫に尋ねて行って、淡ぐらい書庫の中で、ゆくりなくも、原中最秘抄や、千鳥抄の古写本を発見して、これが、日本に、二部か三部かしかない貴重な本であると知ったとき、うれしくて、うれしくて、とてもじっとしていられないくらいでした。そうしたよろこびは、心静かに、文学を鑑賞するときのよろこびと、もっともちがわない欲びでした。私は、文学研究以外に、文学鑑賞という世界が、別に存在するかのように考えていた従来の考えが、根本からあやまっていることを体験しました。研究即鑑賞、鑑賞即生活という境地こそ、私の求めていた境地であって、その境地は、今まで、少しも気がつかなかったけれど、自分自身も、やはり無意識的にもついていたのだと悟りました。この悟りの前には、愚鈍な私には、あまりにも長い試練がありました。堪えられないやうな苦悩がありました。私

はほとんど、常規を逸するような焦慮と苦悶とを経験しました。そういう時、慈父の如き愛をもって、ねんごろに指導して下さり、勇気を与えてくださったのは、近くは藤村先生、橋本先生、久松先生、かつては松井先生、吉田先生、垣内先生をはじめ、多くの恩師先輩の方々でした。

「宮廷女流日記考」は、反逆と異端とを愛し、種々なる焦慮と懷疑とに動揺する二十だいの精神の中に生れたものです。研究と申しまでも、本文の校定、書史の考証、伝記の詮索等に、大部分の努力を費したのですが、しかし、今出して見ますと、その文字の一つ一つに、そういう若々しい精神が、そのままもっているような気がいたします。

本書は、その「宮廷女流日記考」二十三巻にまとめた知識を基礎として、も一度日記全体を読みかえしたときの感激を、そのままに書いて見ようとしたものです。すなわち、考証的な方面は、すべて「宮廷女流日記考」に残し、ここでは一切ふれないで、全然主観的な感じ、あるいは評論だけを書こうと思いました。しかし、また、よく考えて見ますと、「宮廷女流日記考」は、馬鹿々々しいほど大きなもので、永久に世の中にあらわれることはあるまいと思いますし、また、日記文学は、まだ、あまり世の中に理解されていない上に、作者の伝記などについても、ずい分滑稽な誤解もあるようですから、ほんの少しずつでも、書史的な、あるいは伝記的な説明も加えなければいけないとも思われ、やむを得ず、蛇足のようなものを、つけることにしました。

しかし、何といっても、限られた小冊子ですから、とても十分なことの出来るはずはありません。土佐日記は、全然はぶくことにいたしました。紫式部の伝記と、清少納言の伝記と、枕草子の解説および批評とは、近く別に御叱正を仰ぐ機会がありますから、ここでは全然ふれないことにいたしました。また、孝標女の伝記と、更級日記の

解説とは、すでに先輩の權威ある研究が完成せられていますから、別に愚考を加えることを御遠慮することになりました。また、日記文学ではありませんけれど、ほとんど日記といってもいい家集をのこした人で、檜垣姫、伊勢、加茂保憲女、小大君、相模、出羽弁、建礼門院右京大夫、俊成卿女等についても、少しのべたいと思って、すでに原稿もまとめて見ましたけれど、頁の都合上、すべて省略いたさなければならなくなりました。また、十六夜日記および、和泉式部日記の評論、女流文芸の發生についての考察等は、すでに版に組みましたけれど、百五十ページも超加したために、やむを得ず省きました。しかし、これらは、近き将来において、ぜひまとめて出すつもりです。

以上のような次第で、この書は、実に、通俗的な、概論的な、常識的な、研究ともつかず、考証ともつかず、評論ともつかない不徹底な、妙なものになってしまいました。「宮廷女流日記考」で、一万八千枚も稿を重ねて、なお足りなかったものを、この小冊子にまとめるなどとはよほど無理なことでした。この書は、専門の学者のために示されたものでなくて、宮廷女流日記について、まだ多くの知識をもたない人々のために示さるべきもので、したがって、宮廷女流日記の一面の考察にすぎないのです。学問的には、まだまだ、他に多くの方面が残されていることを、何卒御承知下さい。

この書の出るようになりましたのは、全く藤村先生のおかげです。また、橋本、久松両先生には、いろいろ御親切な御教示を受けました。また、高師の玉井先生には、十六夜日記について、いろいろこまかな御指導をうけました。あつく御礼を申し上げます。

ただいま、私は、藤村博士の御指導のもとに、源氏物語諸註考証の大きな仕事に忙殺せられていまして、この書

の原稿の如きは、大部分夜十一時から午前一時までの間に筆を執られたものであり、校正の如きも、電車の中や、駅の待合室や、食堂の片隅などで、寸暇を利用してなされたものです。多分誤りが少くないでしょう。どうか、御親切に御教示のほどお願いいたします。

昭和二年一月

著者

## 第一章 蜻蛉日記

- 一 蜻蛉日記の伝本と註釈書……………一
- 二 道綱母の事蹟について……………一六
- 三 蜻蛉日記にあらわれたる現実生活の破綻と懊惱……………三

## 第二章 和泉式部日記

- 一 和泉式部日記の伝本と註釈書……………六
- 二 和泉式部の事蹟と伝説……………三

## 第三章 紫式部日記

- 一 紫式部日記と日記歌——附紫式部伝研究の参考書について……………一四
- 二 紫式部日記における「心ばへ」なるものの先驗的性質……………二五

## 第四章 更級日記

- 一 生活魔化の芸術としての更級日記……………三

## 第五章 讃岐典侍日記

- 一 讃岐典侍日記の伝本と註釈書……………五
- 二 讃岐典侍の事蹟について……………一六

三 讃岐典侍日記にあらわれたる人間愛と自己凝視……………一五

## 第六章 十六夜日記

一 うたゝねの記と十六夜日記……………一九

二 安嘉門院四条について……………二三

## 第七章 弁内侍日記

一 弁内侍日記の伝本と註釈書……………三〇

二 弁内侍の事蹟について……………三七

三 微笑の文学としての弁内侍日記……………四四

## 第八章 中務内侍日記

一 中務内侍日記の伝本と註釈書……………五九

二 中務内侍の事蹟について……………六六

三 中務内侍日記にあらわれる個性の分裂と動搖……………七四

昭和二年以降研究文献目録……………九〇

解 説……………一〇九

## 第一章 蜻蛉日記

### 一 蜻蛉日記の伝本と註釈書

#### 一

大鏡卷五太政大臣兼家の条に

次郎君は、陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり、道綱と聞えし。大納言までなりて、右大将かけたまへりき。この母君、きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿の通はせ給ひけるほどのこと、歌など書きあつめて、かげろふの日記と名づけて、世にひろめ給へり。

とある。この書を、かげろふの日記といったのは、上巻の終りに、

物はかなきを思へば、あるかなきかの心ちする。かげろふの日記といふべし。

とあるによって由来が明かである。かげろふの仮字は、多く蜻蛉の二字をあてられる。いつの頃からそう書くようになったのか、明かでない。鎌倉時代には、すでに蜻蛉と書いたものであろう。それは、明月記寛喜二年六月十七日の条に、

但馬前司来臨午時許清談移時刻、借草子等、蜻蛉日記、更級日記、隆房卿日記（仮名安元御實）治承右大臣百首、卅六人伝、依同心

人不存隔心云々

とあり、同書天福元年三月二十日の条に、

又蜻蛉日記十所許撰出、同送金吾許、紫日記、更級日記中宮大夫書進之自承明門院被撰其所已書出進入了云云其外蜻蛉所殘歟云々

とあるによって明かであろう。

かげろうの字は、一に遊士とも書かれている。八雲御抄学書篇の私記には、遊士日記といわれている。士は、もと糸であったであろう。清水浜臣の写本には、遊糸日記とあるによつても知られる。

さて、かげろうは、蜻蛉の字をあてるために、虫のことであるか、あるいは陽炎のことであるか、それについての弁が解環に見えて、陽炎の意に取るのが正しいと説いている。

契沖と山川真清との説をあわせ取つた横山由清自筆の書入本に、

かげろふに三あり、野馬と蜻蛉と今一は夕暮に命かけたるなどよめるやう、蜉蝣にやと覚ゆ。されどそれせば和名にはひをむしとのみいへり。万葉に、かげろふの夕とよみたるは、蜻蛉なるを、よくもみずして、かげろふといふのはかなく聞ゆれば、ひをむしの別名かなと思ひたがへて、読なしけるにや。

盈按こは契沖師の説なれと、いかにぞや侍らん、こはただあるかなきかといふ心をもて、野馬陽炎のかげろふとみて有なん。ひをむしの別名などまで思ふべきにあらず。

と見えている。また、帝国図書館所蔵榊原氏旧蔵本上巻の首に、

題号蜻蛉の文字をうめたるはまぎらはしくてわろし。此日記上の巻末に物はかなきを思へば、あるかなきかの心ちする、かげろふの日記といふべしとある詞によりて考ふれば、莊周がいはゆる野馬にして陽炎なり。朗詠にもえられし詩の天外遊

糸或有無とある遊糸、今いとゆふ即ちいにしへに云へる所のかげろふにして、この題号もその心なり。

といって、解環の説に従っている。源氏蜻蛉の巻についても、諸説があつて、一定しないが、この日記に、かげろふというのは、やはり虫のことではなくて陽炎のことであろう。

この書の名は、群書一覽卷三、百人一首一夕話卷五にも見え、林恕の本朝通鑑卷二八にも見えている。群書類従におさめられた本朝書籍目録は、永正二年の写本によつたものであつて、これには

蜻蛉記 三卷

と見えている。林氏本の本朝書目には、

蜻蛉記 一卷

と見えているのであるが、これは、蜻蛉日記のことであろう。内閣文庫所蔵の冷泉家蔵書目録には、

蜻蛉日記 三卷

とあるが、この本は、本朝書籍目録の最も古い写本を伝えるものと思う。冷泉家蔵書目録とは、後人の仮りにつけた名であろう。奥に、

右以冷泉大納言為富卿御本書写之以准后本令一校者也

康安二年正月七日

刑部侍郎光之

とあるのであるから、本朝書籍目録の伝本としては、かなり古い系統のものと見るべきであろう。その本の附録のように書添えられたものに、本朝書籍目録外録というものがあつて、それには、私記の条に

遊士日記傳大納言母

とある。おそらくこれは、八雲御抄を引いたものであろう。

内閣文庫には、二種の色葉和歌集の古写本を伝えているが、その中、弘長二年<sup>壬戌</sup>三月十三日已尅書写之畢と奥書のある本には、撰抄時代者の条に、

傳大納言（道綱）の母かけろふ日記云々

と見えている。

日記の巻数は、流布本はすべて八巻である。上中下三巻を、更に上下、または上中下に分けたのである。この八巻を、元禄十年刊本は三冊となし、宝暦六年刊本は八冊となし、文政元年刊本は三冊としている。八雲御抄学書篇の私記には、日記の名を出して巻数をあげない。本朝書籍目録には、前に上げたように三巻、本朝書目には、一巻と見えている。坂徴の解環に、

近比案ズルニ、上巻ノ終ニカゲロフト名付ル旨ヲ述ラレタルヲ思ヘバ、ソノ本ハ、上中下三巻の巻物ニテアリシヲ、トジ本ニセシ時、丁数カサナル故ニ、今ノゴトク、八冊ニワカチシニヤ。

といっている。日記のような私ざまのものが、巻本にかかれたか否かは、なお十分考えられなければならない。前田侯爵家に秘蔵される藤原定家自筆の土佐日記は、文暦二年五月十三日、定家が、蓮華王院宝蔵の紀氏自筆本を見て、書写したものであるが、その奥書に、

料紙白紙無打高一尺一寸三分許広一尺七寸二分許紙也、廿六枚、無軸、表紙続白紙一枚端聊折返不立竹無紐有外題、土佐日記、貫之筆。

とかいている。これによれば、貫之の書いた土佐日記は、草子でなくして、巻本であったことが分る。

かげろう日記の原本が、巻本であったか、冊子であったかは、かなりむずかしい問題であるが、少くとも、今の

ような錯簡を生み出した本は、巻本でなく、草子であつたであろうと思われる。やはり、更級日記のように、紙の綴じあやまりや、脱落などがあつたものと思われる。三冊について、それをおのおの上中下と區別したのは、後人の所為で、もとはかく順序をたてて、記されたものであるまい。

八冊目の半ばから下は、後人の加筆であることは、すでに契沖も解環も指摘したように、疑のない所であろう。そして、この部分は、別に傳大納言母集ともいわれ、または道綱母集ともいわれて、いずれも宮内省図書寮に秘蔵されている。この家集は、道綱母自身の書いた本当の家集であるとはいえないかも知れないけれど、日記の成立その他について、参考すべき書であるから、これについては、後で少しく考えて見たいと思う。

蜻蛉日記は、現在伝わる古典の中で、最も錯簡の甚しいものの一つで、このままなら、意味の通じない所が多い。流布本の中で、明かに錯簡と認められ、その正しい原形の推知せられる場所が二、三ある。それは、巻中の中、十六丁は十三丁に、十五丁は十四丁に、十三丁は十五丁に、十四丁は十六丁に、それぞれ相前後している。また、巻下の中、十四丁と十五丁とが互に相前後している。この錯簡について、解環は綴じ方のあやまりではなく、巻本の紙の前後したものであらうというけれど、そうではあるまい。必ず刊本の綴じあやまりであらう。清水浜臣の写本によると、この錯簡は全然ないし、前後の関係から、正しい形は、すぐ推定される。

なおまた、刊本と解環本との錯簡の場所は、巻下の下に、ふみみれど雲のかけはし云々の歌のあたりが、十七行ずつ前後錯簡している。清水浜臣の写本は、流布本と変らない。多分解環の方があやまっているのであらう。

次に、本文の記事について、明かに錯簡と思われる場所は、天禄元年六月、貞観殿の尚侍と文の贈答のあるところである。それは、天禄二年六月のことで、あやまって元年の条に輯録されたものと思われる。これについて、柴

## 華物語抄第一に

大鏡<sup>卷四</sup>に貞觀殿内侍と見え、日本紀略<sup>師輔</sup>内融安和二年以從五位上藤登子為尚侍といひ、大鏡裏書には、貞觀殿尚侍登子と題して安和二年任尚侍と見え、蜻蛉日記上卷<sup>康保四年</sup>貞觀殿といひ同中卷<sup>天祿元年</sup>に、貞觀殿の御かたは、をととし内侍のかみになり給ふと有、安和二年は昨年にて、去々年にはあらず。前田夏繁云天祿二年の文の元年に混入したるならんといへり。

といつてゐる。この外、かくのごとく錯簡した場所が、他にいかほどあるのか、計り知れない。解環に、書写の際に誤りやすい文字について、かなり詳細な考証がある。

ソノ転ノ大例ヲイハム、<sup>うろ</sup> <sup>らる</sup> <sup>れ</sup>等ハ、互ニアヤマリヤスシ、或ハ<sup>に</sup>ノ篇旁ヲ脱シテ<sup>ト</sup>成、<sup>に</sup>ヲ<sup>に</sup>ニタガヘ、<sup>に</sup>ハ<sup>に</sup>ニ転ジ、<sup>あ</sup>ハ<sup>世</sup>ニ変ジ。也ガ又<sup>世</sup>ニ化ス、カヤウノ類カゾフルニイトマナシ、甚シクシテハ<sup>ト</sup>ノ一字ガ<sup>らん</sup>ノ二字ニ分レ、<sup>ソ</sup>ノ<sup>ニ</sup>字ヲ<sup>乃</sup>ノ一字ニアハセ、或ハ<sup>あ</sup>ノ字ガ<sup>ゆ</sup>ノ二字ニハナレ<sup>る</sup>ノ字ガ<sup>る</sup>とノ二字ニ成、又ハ<sup>え</sup>ノ二字ニモ誤ル、コレヲノルイ又スクナカラズ、サレドソレヲハ猶イマダシ、<sup>悠</sup>ノ字ガ<sup>は</sup>ノ二字ノカナニナリ<sup>也</sup> <sup>櫃</sup>ヲカナニウツセルガ又転ジテ<sup>なり</sup> <sup>ひ</sup> <sup>ひ</sup>ニウツリナガレ、或ハ<sup>ち</sup>ノ字<sup>り</sup> <sup>る</sup>ノ三字ニ転ゼシ如キモ有、カク大ニ転ズトハイヘドモ、只一転ノ誤ハヨク又思ヒメグラシテサカノボリモトムルニ、猶タヨリナキニアラズ、モシクハコレヲ又再転シテ、凡仮字ニハ四十七字ノ外ニモムカシヨリ書ナラハセシカナ文字ノアマタアレバ、ソレヲノカナニ又変ジカハリテ、後ハ何ヲ便ニモトノ字ヲサグリ出サン、タトヘバ世ニウツケタルシレモノガ、高津鳥トヤラン者ニフトイザナハレテシラヌ世界ニサマヨヒ、我フルサトハイヅコノイツチナラント方角ダニシラヌ状ニ成ヌベシ、チカクタトフルニ此日記ノ上卷ニ兼家公ノ長哥ノ中ニ<sup>や</sup> <sup>ひ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>れ</sup> <sup>と</sup> <sup>の</sup> <sup>あ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>か</sup> <sup>は</sup> <sup>ト</sup> <sup>書</sup> <sup>ル</sup> <sup>所</sup> <sup>有</sup>、アマタタビ傾キテ思ヒメグラセバ<sup>や</sup> <sup>し</sup> <sup>ハ</sup> <sup>間</sup> <sup>ノ</sup> <sup>字</sup> <sup>ヲ</sup> <sup>カナ</sup> <sup>ニ</sup> <sup>書</sup> <sup>カ</sup> <sup>ヘ</sup> <sup>タル</sup> <sup>也</sup>、其又問ノ字ハモト何ノ字ヲ訛リシ物トオシハカリ置テ、サテ前後ノ文言ヲ考合テヨメバナニクレコトノアリシカバノ転訛セル事疑ナシ、即右ノ長哥ノ末ニモ<sup>ん</sup> <sup>ハ</sup> <sup>き</sup> <sup>く</sup> <sup>ろ</sup> <sup>ト</sup> <sup>云</sup> <sup>ヘル</sup> <sup>ヲ</sup> <sup>原本</sup> <sup>ニ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>て</sup> <sup>る</sup> <sup>ト</sup> <sup>アリ</sup>、是ハ又今ガ何ニ変シタル也ケリ。

またこの日記に、「も」の仮名を、「ん」と書いた所が少くない。これについて解環に考証があるけれど、煩わしいからはぶくことにする。

二

蜻蛉日記の流布刊本は、元禄十年版のものと、宝暦六年版のものと、文政元年版のものと、三種がある。故藤岡博士は、宝暦三年の版があるようにいわれているが、六年の誤であろう。これ等の版本は、いずれも同一の版であって、異本ではない。したがって、本文を校定する上に、何等参考になるものではない。

契沖は、元禄九年、水戸家の本をもって、校合して、蜻蛉日記考証八巻を書いたのであるが、この原本は、京加上加茂の文庫に秘蔵せられているということである。この考証は、蜻蛉日記研究として、最初にあらわれたものであるが、詳しいものではない。ところどころ抜き出して考をのべてあるにすぎない。天明五年に刊行せられた蜻蛉日記解環十八冊は、坂徴、仲文甫と号する人の著す所である。著者の伝は明かでない。契沖の考証本に基づいて、私考を加えたものである。坂徴は、契沖の自筆本を用いたのではなく、写本三種によったものである。その尾州から求めたものは、谷川士清の本をうつしたものである。解環の説には、承認し難きものが少くない。これは、坂徴が、国文学に対する知識の不十分であったためであろう。しかし、他に類書がなく、異本の発見せられない今日に於ては、この書も重要な参考資料であろう。就中、その大鏡、栄華物語を引いて論じている所は、最も参考に価するであろう。

次に未刊のものではあるが、鎗田亀次氏の「平安朝日記の研究」は、大部分を蜻蛉日記のために費されたもの